

## 音楽の聴取経験とライフヒストリー

### —レコード鑑賞会の参加者への聞き取り調査から—

Experience of music listening and life history:  
—Interview survey on participants in record concerts

小泉 恭子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学社会情報学部

Kyoko Koizumi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：音楽，聴取，メディア，ライフヒストリー，コミュニティ

Key words : Music, Listening, Media, Life history, Community

#### 抄録

小論は、日本各地で近年増え続ける地方自治体や音楽ホールによるレコード鑑賞会が、地域の高齢者による、音楽という趣味を介したコミュニティとして創生されている状況に注目した。社会学のライフヒストリーの研究手法を用いながら、レコード鑑賞会の参加者の音楽聴取経験を解明して、歴史的・身体的な経験が公共圏でどう共有されていくかを論じた。レコード鑑賞会の参加者のタイプを3つに分け、そのうち第一のオーディオマニアへの聞き取り調査により、音楽でつながる趣味縁において、参加者同士が互いに承認関係を結んだり、地域貢献といった参加動機から社会関係資本の獲得へと活動を発展させたりする社会化の過程を明らかにした。

#### はじめに

小論は、日本各地で近年増え続ける、地域に根ざした高齢者向けのレコード鑑賞会に着目する。高齢者が地域コミュニティで、音楽を介し、他者とどうつながっているのかを調査することで、社会における音楽の位置づけを再定義する。

音楽の聴き方がレコードやカセットテープ、CDといった記録メディアの変化でどう変わったかを、レコード鑑賞会に集う高齢者は経験的に語る事ができる。こうした音楽メディアとの接触は、個別的な経験と集会的な経験に分けられるが、レコード鑑賞会のような他者とのつながりが求められる場では、後者の集会的な経験が共有されているのではないか。時代の流行歌のような音楽そのものの共有ではなく、音楽メディア体験の歴史的・身体的な共有性があるからこそ、レコード鑑賞会は全国的に広がりを見せているのではないか。

音楽メディアの社会史は文献研究が中心で、リスナーの口述史に焦点を当てた調査はまだ少ない。

存在する調査も、ジャンルや時代を特定していたり、いわゆる「文化エリート」への個別のインタビューであったりする<sup>[1][2]</sup>。市民社会で、アマチュアのリスナー同士がどうつながり、どんなコミュニケーションを経て、現代社会に新たなコミュニティを形づくっているかが見えづらい。小論では社会学のライフストーリーの研究手法を用いながら、レコード鑑賞という地域コミュニティで人々が関係性を築く際、音楽そのものの共有を超え、音楽メディア経験の共有性をどう介在させているかについても探る。

#### 1. 研究の背景

トーマス・エジソンがフォノグラフを発明して以来、140年にわたる音楽メディア史の記述作業が進んでいる<sup>[3]</sup>。音楽メディアは変化が目まぐるしく、デジタル化やクラウド化が進む音楽の未来予想図を古いアナログメディアの歴史的研究により描きだそうとする研究者の焦燥が、この領域の

調査を加速させている。その一方、過去のものとされているレコードは、もっぱらアーカイブの充実など「資料としての保存」に関心が向けられ、「現在や未来における活用」は忘れられがちだ。

音楽メディアの変遷を語るときにメディア技術史が陥りがちな技術決定論<sup>[4]</sup>に終始することを避けるため、小論ではレコード鑑賞会の参加者への聞き取り調査による経験的記述により、質的なデータをもとに論じていく。CD登場以降は時代遅れといわれてきたアナログメディアが、無償の情報氾濫するデジタルメディアの時代にプレミアムな価値をもたらすものとしてふたたび脚光を集めている理由を、レコード鑑賞会の参加者の声から掘り上げる。

こうしたリスナーの声を集積し、デジタル化以前の音楽メディアが社会や地域コミュニティ、ひいては高齢者のアイデンティティの再構築に寄与する機能的役割を分析することで、21世紀のデジタル社会における音楽の存在意義を人々の経験的語りから実証的に解明しようとする音楽メディア史研究にも発展しようとする。

## 2. 問題の設定

音楽のデジタル化が進んだ現在、若者はデジタルメディアのMP3、高齢者やオーディオマニアはアナログメディアのカセットテープやレコードと棲み分け、音楽を聴いている。団塊世代を中心とする「アナログ世代」は、高齢になっても地域のレコード鑑賞会に足を運んで保管していたレコードを活用するだけでなく、中古や新譜のレコードを購入してまで、鑑賞会に集う他の参加者とともに音楽を楽しもうとしている。アナログ世代の人々はなぜ、好きなレコードを、一人ではなく、だれかと一緒に聴こうとするのだろうか。このような、音楽を専有するのではなく、他者と分かち合おうとする聴取態度はどこから生まれてくるのだろうか。こうした聴取の傾向は、音楽メディアの変遷とどのような関係があるのだろうか。

## 3. 研究の目的

小論は、人がコミュニティにおいて他者と共生しながら自己の立ち位置をはかるさまを、音楽という趣味を結節点に、地域に根ざしたレコード鑑賞会に集うアナログ世代の高齢者への聞き取り調査を通じて解明することを目的とする。

ここで主眼とするレコード鑑賞会とは、地方自治体や音楽ホールが主催したり、私的に集まったりして、アナログレコードを持ち寄って聴くイベントである。一般に、音楽の聴取は演奏に比べて個人的な行為であると考えられがちだが、デジタル化が進む現代においても、インターネット上のバーチャルなつながりではなく、リアルな場において集合的に音楽を聴く地域コミュニティとしても注目される。レコードで音楽を真剣に聴く「専念聴取」でありながら、聴く行為が他者へと開かれていく「周辺の聴取」や「非専念聴取」を包摂する点が特徴だ。

レコード鑑賞会の参加者は、自分が持ち込んだレコードが再生されるまで、他の参加者が持ち込んだレコードを聴きながら待つことになるため、ラジオのリクエスト番組のような順番待ちや期待を体験することになる。オーディオマニアにありがちな自己の小宇宙にこもった個人的な聴取体験ではなく、他者の愛好する音楽を受け入れようとする開かれた聴取が重なり合って、集合的なレコード鑑賞体験が成立する。小論は、これまで「私的な」「個人の」体験としてとらえられてきた音楽聴取を、アナログレコードを持ち寄る鑑賞会という「集合的な」「公共圏」において再布置する。

## 4. 研究の方法

レコード鑑賞会に参加する50歳以上の男女への聞き取り調査を通じ、彼ら彼女らの個別の記憶（個人的記憶）にもとづいた音楽聴取の実態を解明しつつ、世代論で括られる時代の記憶（文化的記憶）や集団の記憶（集合的記憶）への個人の聴取体験のつながりやひろがりも把握しながら、それぞれのリスナーの音楽や音楽メディアへのこだわりに注目しつつ分析していく。

筆者が2010年より行っているレコード鑑賞会の調査で、主催者や講師への聞き取りから、参加者は概ね次の3つのタイプに分かれることがわっている。

- ① 音質にこだわるオーディオマニアの層。スピーカーやプレーヤーなど音楽再生機器への関心が強い。自宅のオーディオセットよりも高音質・大音量でレコードが聴けることを目的に集う。筆者が知るかぎり、ほぼ全員が男性である。

② 青春時代に聴いていた音楽へのノスタルジアを追求する層。自宅にレコード再生機器を置いていない場合が多い。歌謡曲やドーナツ盤のジャケットを懐かしむ傾向が強い。男女ともに存在する。

③ 地域の居場所として参加する層。レコードは入り口で、音楽という趣味を介してコミュニティに参加できる安心感・満足感があり、リピーターが多い。女性が目立つ。退職後に地域コミュニティに参加する男性が60歳以上であることに對し、女性は子育てや親の介護を終えた50歳すぎからが多い。

上記の3つのタイプの参加者のうち、小論では第一のタイプのオーディオマニアに絞って考察する。レコードや音楽の内容はもちろん、どんな再生機器で聴くかに対するこだわりも強く、音楽や音楽メディアの変遷とライフストーリーとの関係性が他のタイプより明確に浮かび上がると考えられるからだ。

以下、小論の調査の概要を述べる。2018年1月から2019年8月まで、大阪府下と兵庫県下で聞き取り調査を行った。両府県で調査を行った理由は、広範囲の市町で定期的にレコード鑑賞会が開催されており、市民活動として定年後の男性の参入が多いことが事前調査で明らかになったからだ。単発のイベントとしてではなく、近隣住民を対象としたレコード鑑賞会を定期的に開催している以下の自治体の音楽ホール、市民センター、公民館でそれぞれレコード鑑賞会の参与観察を行った。

#### 【大阪府下】

- ・大阪狭山市（大阪狭山市文化会館 SAYAKA ホール）
- ・貝塚市（貝塚市民文化会館コスモシアター）
- ・岸和田市（岸和田市立公民館・中央地区公民館）
- ・四条畷市（四条畷市市民総合センター）

#### 【兵庫県下】

- ・西脇市（西脇市立音楽ホール・アピカホール）

また、大阪府高槻市内で月例会を開催している「関西 SP レコード愛好会」でも、参加者に聞き取り調査を行い、SP レコード鑑賞会での参与観察を

行った。

レコード鑑賞会の主催者が公的機関か私的機関かの違いで会の目的も異なり、集う参加者のタイプも異なるため、集う場とコミュニティの性格、参加者のタイプを掛け合わせて調査することが肝要だ。だが、小論では紙幅の制限もあり、先に述べた3タイプの参加者のうち、レコード鑑賞会の中軸となっている第一のタイプの参加者である10名の男性への聞き取り調査に絞って分析する。このうちの2名については聞き取り調査を続行中であり、小論ではこの2名を除く8名のライフストーリーにおける音楽や音楽メディアの変遷と聴取経験の関係について論じていく。

#### 5. 音楽とライフストーリー

調査のインフォーマントは次のとおりである。文中ではイニシャル（イニシャルはインフォーマント間で同じものが重なった場合は、1, 2と数字をつけて区別している）を用いる。

- ・Kさん：昭和9年生まれ・大阪府在住
- ・M1さん：昭和21年生まれ・大阪府在住
- ・M1さん：昭和26年生まれ・兵庫県在住
- ・N1さん：昭和16年生まれ・大阪府在住
- ・N2さん：昭和24年生まれ・大阪府在住
- ・Hさん：昭和25年生まれ・兵庫県在住
- ・Yさん：昭和25年生まれ・大阪府在住
- ・Tさん：昭和22年生まれ・大阪府在住

上記のうち、Kさん、M1さん、M1さんは、拙著『メモリースケープ』（2013）<sup>[5]</sup>ですでに音楽とライフストーリーについての聞き取り調査の結果を発表しているため、今回のインタビューでは音楽再生機器や記録メディアの変遷とライフストーリーの関連を中心に調査した。本節では、N1さん、N2さん、Hさん、Yさん、Tさんの5名に、音楽とライフストーリーの関係について尋ねた聞き取り調査の結果とその考察について述べる。

#### 【N1さん：昭和16年生まれ・大阪府在住】

大学は理系の学部出身で、理系の仕事に携わってきたN1さんは、自宅のガレージを自分の部屋にして、蓄音機やスピーカーを自作するほどのこだわりがある。SPレコードの愛好会の世話役も前代の会長から引き継ぎ、各地で蓄音機やSPレコー

ドの講師も務めている。  
活動の原点は幼少期の蓄音機体験にあるという。

子どもの頃、遊び道具として「このレコードとこのレコード」と、童謡を20枚ほど、母親がかけてくれたんです。母親の実家から大阪に引っ越すときに、レコードを割らんように携帯していこうと思ってたんですが、家財道具を優先して、トラックに乗せてくれない。どうしても「要らんもんは捨てる」と。「もっといい電蓄(電気蓄音機)、買ってあげるから」とごまかされてね。

結局、電蓄は買ってもらえず、それから10年近く経ってから、「お小遣いを貯めて、兄貴が半分出して」レコードプレーヤーを買ったそう。大学に入学後、会社に入るまではLPレコードを中心に聴いていたが、引っ越しの際に処分されてしまった恨みから、SPレコードへの思いが30年間ずっとくすぶっていたという。

50歳を過ぎると会社勤めも時間の融通がきくようになり、新聞にSPレコードの会のことが載っているのを見た。2001年に会社を定年で辞めたとき、現在会長を務めるSPレコードの愛好会がインターネットでPRしていたので、電子メールを送って参加した。

(われわれの会は)ジャンルは限定してない。SPレコードなら歌謡曲でもジャズでも。ジャズも民謡もあって、バウンダリーはあいまいです。シンフォニー、懐メロなど、「俺の、ワシはこれが好きや」という個人的な特徴が濃い。

指揮者のフルトベングラーにしても、オペラ歌手のカルーソーにしても、現場で聴いているわけではないので、自分なりの演奏の聴き方で楽しむのがSPレコードの世界という。

N1さん自身はSPレコードならなんでもいいという考えで、落語・浪曲・漫才・浪花節のSPも2~3箱ある。

クラシックは1200枚ほど。ガレージいっぱい。SPレコードはせいぜいここ20年。会社時代はボーナスで初めて買ったステレオセットでLPを聴いてました。職場で音楽が趣味の人も

いましたけど、その人は仕事と音楽を両立していた。私は趣味の30年でした。

最近ではSPレコードの会の高齢化が進み、重いSPレコードの持ち運びが辛い会員も増えてきたため、CDの復刻盤をかけることも認めるようになったという。「SPの世界、とくにクラシックでは万人向けのレパートリーの影が薄い。オペラ歌手の歌は聴くもんか、という人もいますから」と、「俺の」を通す会員たちも、N1さんが愛好会で披露した自作の蓄音機とスピーカーの音色に、少年のように耳を傾けていた。個人と個人の領域間の線引きが強いSPレコードの愛好者たちだが、蓄音機への情熱という音楽メディアの共有性が仲間意識を支えていることがわかる。

#### 【N2さん：昭和24年生まれ・大阪府在住】

京都市内で育ったN2さんは、骨董品蒐集から蓄音機へと関心が移っていったリスナーだ。小学生の頃、親戚のお店を手伝って千円単位でお小遣いをもらい、切手シートやコインを集めていたという。「柳宗悦や白洲正子みたいに、生活をひと昔前にしようと思って」、プラスチックではなく、うるおいのある生活をめざして骨董品に傾倒していった。「食器も明治や江戸後期のもの、映画のポスター、吉田博とかの新版画も。家(マンション)、もう一軒借りて集めてましたわ」。

蓄音機も飾りとして、ビクトローラの中型を置いたそう。20代から30代中頃まで「軽トラで壺やらプラスチックのラジオやらドーナツ盤やら二束三文で買い集めた」から、「給料の半分でレコード買った、なんて自分は一切ない。新品のレコードなんてどこで買うかわからない」という。「フオークソング(のレコード)をターンテーブルで回して、焼酎飲みながら一緒に歌う」のが楽しみだった。

その後はレコードからはしばらく遠ざかっていたが、ジュークボックスを集めている人からカセットテープをもらったり、NHK-FMで日本製ポップス特集をエアチェックしたりしながら音楽を聴くうちに、「何回聴いても飽きがこなくて、私はジャズが本当に好きなんだ」と気づき、レコードの蒐集と鑑賞に傾いていった。

48歳のときに2つあった家のひとつをたたんだため荷物が入りきらず、SPレコードも洋楽はビリー

ー・ホリデイだけ残してほかは処分した。60歳のときには、年に一回、舞台の発表会をしている人たちから、幕間にBGMを流してほしいと頼まれ、ジャズをかけたことからレコード熱が再燃し、退職金を何百万も投じて蓄音機とSPレコードを集めはじめた。「ビクトローラに、コロムビアの卓上型の蓄音機、真空管アンプも3つか4つ持ってる」。50代ではじめた仕事を今でも続けているので、多少は金銭的な余裕もあって蒐集が続けられている。

現在は「SPだけで1500枚」あるという。「最近ドーナツ盤は聴かない。LPのほうが音いいから」というN2さんは、蓄音機ファン、SPファンの諸先輩方を見習いたいと、N1さんが会長を務めるSPレコードの会にも参加している。2018年6月には大阪府北部地震で部屋の中にレコードが散乱してしまい、後片付けが大変だったという苦労話もしつつ、気持ちを切り替え、各地のレコード鑑賞会にもフットワークよく顔を出している。鑑賞会ではSPの知識という文化資本を惜しげもなく披露しつつ、人的ネットワークも広げて、社会関係資本も蓄積中だ。

#### 【Hさん：昭和25年生まれ・兵庫県在住】

Hさんは、会社経営を60歳で退いてから蓄音機の蒐集にはまった。音響機器の知識を生かした活動を広げ、今ではレコードが縁で近隣のコレクターからも声がかかるほど、地域でも蓄音機の愛好家として知られるようになっていく。

もともとクラシック音楽の生演奏のコンサートが好きで、ステレオやレコードにも関心があったが、退職後に出会った蓄音機の音に魅せられ、SPレコードとともに蒐集しはじめたという。自宅にレコード鑑賞ができるスペースをつくり、アナログ道楽者の隠れ家として開放している。2017年からは近隣の音楽ホールの自主企画として蓄音機コンサートを年に数回開催し、平均して30名前後の地域住民がオーディエンスとして参加している。蓄音機もSPレコードも自前で持ち込む分、準備が大変だが、コンサートの司会進行は古くからの友人に頼み、Hさん自身はプログラムの選定や当日のレコードかけなど、2名で役割分担しながら続けている。

Hさんがボランティアで「蓄音器」（楽器のひとつと考えるHさんはこう表記する）コンサートを運営するホールの会報（2017年発行）で、Hさん

はその魅力を次のように説明している。

私は、40歳頃からアナログレコードを本格的に聴くようになり、オーディオ機器も次々と買い求めて現在に至っております。

実は、5年前に初めて蓄音器に出会い、約100年前に製造された骨董品が奏でる「生々しい響き」に圧倒、感動させられ、蓄音器やSPレコードの蒐集（しゅうしゅう）にのめり込んでしまいました。

蓄音器の音色は、一般のオーディオ商品と比較すると、より暖かで柔らかで深みのある響きであると思います。特に歌唱だと自分の目の前で、実際に歌手がマイクを前にして、立って歌っている感覚が伝わってきて、まさに生々しい音色です。

Hさんは音楽への関心がしばらく薄らいだ時期もあったが、60歳からまた力を入れはじめ、一時には蓄音機を15台も所有していたとのこと。SPレコードと合わせての蓄音機の蒐集にはさぞコストもかかるであろうが、「クラシックのステレオも7~800万（円）しますから」とHさん。音楽ホールの蓄音機コンサートではこれまで歌謡曲がクラシックを特集してきたが、歌謡曲の回にはレコードに合わせて口ずさむお客さんもいて、「昔なつかしいと聴いてくださるお客さんがいらっしゃるかぎり続けたい」とのこと。

高齢化が進むなか、なつかしい昭和歌謡をSPレコードで聴くという「回想法」も注目されているので、良い音響の音楽ホールで聴いてもらう体験を分かち合いたいと意欲を見せる。鑑賞会に足を運んでくれる人を増やすことが今の課題だ。「今日来てくれた方が、次にまた友だちを連れてきてくれるといい」と、蓄音機の愛好者がしだいに口コミで広がっていくことを期待している。

#### 【Yさん：昭和25年生まれ・大阪府在住】

中学生時代にビートルズを通じて洋楽に目覚めたというYさんは、それまでには三橋美智也や美空ひばりを聴いていたが、洋楽に転じて以降はラジオで聴いて好きになったミュージカルを中心にレコードを買い集めたそう。今でも近隣のレコード鑑賞会には、他の参加者とかぶらないように、ミュージカルから選曲したレコード持参で参加し

ている。

中学生のとき、ラジオの深夜放送より少し前の時間帯に放送されてた「9500万人のポピュラーリクエスト」で、(ビートルズの)「ア・ハード・デイズ・ナイト」をカセットテープに録音した。レコードを買うだけじゃなく、ラジオからエアチェックもして、カセットデッキは3台以上買い替えた。TEACのA-450, アカイ, AIWAも買いました。レコード屋さんで音楽用のカセットテープを売っていて、手軽に録音できた。

Yさんは30歳前後で何度か転居した際、多くの持ち物を処分したそうだが、スピーカー、アンプ、レコードプレーヤーは部屋の隅に積み重ね、レコードは処分しなかったという。CDやカセットは「手近で、置きっぱなしにしていた」というが、レコード鑑賞会の広告を見て、通うようになって以降は、過去に買い集めたレコードを掘り起こしたり、新たに中古レコード店を覗くようになったりしたそうだ。

転機は一歳年上のレコード仲間との出会い。高校時代の同級生が自営の店を改装したスペースを使わせてもらって、月に何度か自主的にレコード鑑賞会を開くようになったのだ。スピーカーやアンプを10個揃え、並べて音を出し、スイッチ一つで切り替えるセッティングをした。よき「相棒」を得て、準備を重ねて自分たちで開くレコード鑑賞会が、なによりも充実した楽しい時間だという。

買い集めたカセットデッキは今、90代の母親が町内会で週二回、カラオケの稽古をする際のカセットテープのダビング用に活躍している。マスターテープを持ち主に返す前にお母さん専用のテープを作成し、親孝行しているのだ。

Yさん本人もカラオケはするが、森進一やかまやつひろしなどオールジャンルで歌う。対照的に、レコード蒐集のほうジャンルや好みをはっきり決めているようだ。相棒との自主的なレコード鑑賞会、レコードを聴きに参加する鑑賞会のほか、名乗り出て、公共ホールのレコード鑑賞会のリーダーも務めている。

【Tさん：昭和22年生まれ・大阪府在住・男性】

小論の調査に協力してもらったインフォーマントのうち、回想の中心が楽器演奏だったのがTさ

んだ。音楽を聴くだけでなく、奏でる喜びも語った。

小学校のときはリコーダーやハーモニカだけだったのに、中学生になったらトランペットとかトロンボーンとかが吹けるというので、みんなブラバン(吹奏楽部)に集まった。女の子はクラリネットとかフルートで、僕らは馬力のあるユーフォ(ニウム)とかチューバとか任されました。「錨を上げて」とか、マーチをよく演奏しましたね。

三男だったTさんと音楽との出会いは、一番上のお兄さんがSPレコードの78回転で、鉄の針でチャイコフスキーの「白鳥の湖」を聴かせてくれたこと。二番目のお兄さんはベニー・グッドマン好きで、ビッグバンドの知識はここから得た。お父さんとお母さんは歌謡曲が好きで、家じゅう音楽好きだったが、好みのジャンルはそれぞれだった。

中学時代には、吹奏楽部の近隣の強豪校に追いつけ追い越せで練習をひたすら頑張ったが、演奏会に数多く出演してアンサンブルの達成感を得たからか、高校・大学では個人戦で出られる柔道部に入った。「プラスから、『パートが足りない』と誘いがきましてね。野球の応援とか運動会の応援に補欠で出てました」。

学生時代には、「ジャズ喫茶の店主と仲良くなって、コーヒー一杯で2時間くらいがんばって、頭ふって首ふって」レコードを聴いた。「だれそれはこの時期がよかった」などと語り合いながら聴き合ったそうだ。社会人になってからも、大阪の日本橋や難波の中古レコード店をめぐったり、ジャズ喫茶をまわったりして音楽と触れ合ってきた。

仕事の関係で住んだ地方都市では、毎週金曜夜に生の演奏会があり、終演後に演奏家が訪れる音楽喫茶で、楽器持参で来た音楽家が順繰りに演奏するのを聴けたという。「ジャズを聴くにはものすごくいい環境でしたね」。

現在では40名ほどの男声合唱団に入って歌も歌っている。Tさんにとって音楽はずっと身のまわりにあったものだ。2019年春からは近隣のレコード鑑賞会のサポーターも務めている。「手持ちのレコードは500枚超すかな。でも、SPレコードは処分してしまった。蓄音機も処分してしまっ

惜しいことでした」といいながら、手伝うレコード鑑賞会で紹介される蓄音機コーナーのプレーヤーをまぶしそうに見つめていた。鑑賞会への参加のきっかけは、新聞の紹介記事で見たステレオやアンプだった。音響機器へのこだわりが、鑑賞会の世話人への共感を強める原動力になったのだ。

### 【考察】

従来の血縁、地縁、社縁とは異なる社会関係資本 (social capital) である「趣味縁」の意義を若者研究において調査した社会学者の浅野智彦は、「なぜ人は趣味を仲立ちにすると自分たちとは異質な他者とも対等につきあっているのか」という問いを投げかけている<sup>[6]</sup>。浅野によれば、社会関係資本の機能とは「仲のよくない相手とでさえも必要に応じて協力を調達できるような作法を身につけること」であり、もし趣味縁が「同じ趣味を楽しむ仲間としての共感によるもの」で、「異質性を共感によって消去するという『仲良し』だけの共同体になってしまう」だけなら、『仲良し』を超える作法はいったいどのようにして生み出されるのだろうか」と問う<sup>[6]</sup>。

浅野は、趣味縁の三つの特徴をおよそ、趣味への愛が深いゆえの葛藤、趣味への愛による葛藤の克服、その克服の過程の要になる承認関係 (尊敬や敬意)、であるとしている<sup>[6]</sup>。ここで浅野が若者研究において示す「仲良し共同体」と「趣味集団」の違いは、小論の高齢者によるレコード鑑賞会への参加者の動機づけにも当てはまる。

本節でライフヒストリーを紹介した5名のうち、N1さんとN2さんが会員制のレコード鑑賞会、それ以外の3名は参加がオープンな地域のレコード鑑賞会の参加者や世話人だ。会員制のレコード鑑賞会はSPレコードの稀少な情報収集目的と、蓄音機やSPレコード蒐集という世界における自分の立ち位置を確認するため、という意識が参加者にも強く、浅野のいう「趣味集団」における「承認関係」で結ばれている。一方、オープンなレコード鑑賞会への参加者は、いずれも定年後の「地域貢献」や「公共圏におけるつながり」を試みての動機づけが明確だ。

教育学者の佐藤智子は、学校教育以降の、成人期の学習の効果を「社会教育における社会関係資本」から検討し、教育学者のジョン・フィールドの論考をもとに、「結束型」(bonding) と「橋渡し

型」(bridging) という社会関係資本の2類型に分けて論じている。「密で閉鎖的なネットワーク」の「結束型」に対し、「緩やかで開放的なネットワーク」の「橋渡し型」では生涯学習に対する効果の可能性も異なる。「結束型」は「受け取る情報への高い信頼」があり、「橋渡し型」は「多様なアイデア・情報・スキル・知識の、集団内部、あるいは集団間の相対的に自由な交換」があるとする<sup>[7]</sup>。

この2類型でいえば、SPレコード鑑賞会は「結束型」、地域のレコード鑑賞会は「橋渡し型」に当たる。佐藤によれば、ポスト近代型の能力観においては「橋渡し型」(弱い紐帯)の社会関係資本の価値を高めているが、個人化する社会変容を背景に「結束型」(強い紐帯)の社会関係資本の必要性も高まっているという<sup>[7]</sup>。佐藤の研究は子ども時代からの学習との継続も念頭に入れており、小論で研究対象としている高齢者のライフヒストリーへの援用も可能である。結束型コミュニティへの参加者も、橋渡し型コミュニティへの参加者も、ともに幼少期の音楽や音楽メディア、モノとしての蓄音機やレコードとの出会いが生涯を通じて彼らを音楽経験に結びつけ、仕事を引退してからも音楽を介した趣味縁へと導いている。

では、個別になりがちな音楽メディア体験を、地域コミュニティのような公共圏で共有体験へとひらいていくにはどんな工夫が必要なのか。残る3名のインフォーマントの語りから分析したい。

### 6. 音楽メディアとライフヒストリー

本節では、拙著 (2013) <sup>[5]</sup>で、レコードを介したコミュニティラジオの担い手として紹介したKさん、M1さん、M2さんを対象として、音楽再生機器や記録メディアの変遷とライフヒストリーの関連を中心に論じる。

#### 【Kさん：昭和9年生まれ・大阪府在住】

Kさんは昭和ひとケタ生まれ。好きなタンゴのレコードをMDに録音して日々行う独自の筋力トレーニングのBGMにしている85歳だ。今回のインタビューでは、幼時からの音楽の聴き方の変遷、音楽再生装置と録音媒体の変化について尋ねた。

真っ先に出てきたのが、マスメディアを介さず目の前で接した「青空楽団」の話だ。

戦争の空襲で (大阪府の) 堺の街も焼け野原

になって、ポチポチと復興が進むなか、青空楽団というのがあった。2年くらい続いたかな。駅前の空き地に5、6人の男女が集まって、ギターやアコーディオンを弾きながら、歌う人は台の上に立って、残りの人はわら半紙にガリ版刷りした歌詞を一枚十円で売ってた。曲は当時はやりだした「リンゴの唄」、「東京の花売り娘」、「帰る船」、「港が見える丘」、「星の流れに」とか。空き地以外には闇市がずらっと立ち並んで、戦災の傷跡が生々しく残ってた。

次に話に登場したのがラジオである。

戦争が終わった年はまだ小学生やった。その頃はラジオ放送はNHKしか無かったんで、ニュースと天気予報とラジオ体操はいつの時代でも同じやけれど、時代の流れやね、戦後は英会話の番組が増えました。子ども向けのドラマでは、「鐘の鳴る丘」など、夕方の番組で聞きましたね。もうひとつ、「向う三軒両隣」は喜劇。BK（NHK大阪放送局）からのドラマ、「お父さんはお人好し」は、花菱アチャコと浪花千栄子のコンビで、おもしろいホームドラマやったで。日曜日は三木鶏郎の「日曜娯楽版」。この放送でおもしろかったのは冗談音楽のコーナー。世相、風刺と芸達者な熊倉一雄、丹下キヨ子、それに三木のり平たちのコントで楽しませてくれましたね。

Kさんが音を録音する装置として最初買ったのがオープンリールデッキだった。音源を「ライブラリーとして残しておこうという気持ちはなかった」ため、同じテープにレコードやラジオの番組を上書き録音したという。橋幸夫が好きで、昭和35年の「紅白歌合戦」は8ミリビデオで録画したそうさ。

後にKさんが70代で参加することになる地域のレコード鑑賞会には、こだわりのスピーカーと銘打ったALTECのA7、ウッドホーンのパイオニア・エクスクルーシブ・モデル2301などでレコードが聴けるというので、「わが家にもたしかレコードあったなあ」と、押し入れの奥に捨てずに保管してあったスリー・グレイセスのドーナツ盤を持って出かけ、かけてもらって久しぶりに聴けたことがうれしかったそうさ。

Kさんの80年にわたる音楽歴は、歌詞のガリ版刷りやラジオ、蓄音機とレコード、オープンリール（デッキ）からテープレコーダー、MD、そして高音質のスピーカーへとめまぐるしく移ってきた様子がわかる。

【M1さん：昭和21年生まれ・大阪府在住】

Kさんとは対照的に、「私は、レコードはレコードとして聴いて、レコードからテープに録音しなかった」と語るのM1さんだ。

オープンリールは音質がよかったですよ。昭和44、45年くらいだったか、生録のエアチェック用に買いました。FM放送がはじまったのが大きかったですね。聴いたときふるえたほど音が良かった。それからは『週刊FM』見てスタンバイ。重ね録音していきました。NHK-FM（大阪）はフェスティバルホールのライブ中継を放送したんで、録ってました。

放送局用のTEACのA-6100はボーナス12分割で買って、テープデッキもSONYのTC-255を購入した。

カセットは便利だけど簡易。子ども用のポータブルとか、お稽古用とか、会社の講演会をみんなにダビングして配ったりするのに使っていました。テープデッキは音楽用でしたけど、カセットテープになって使いやすく持ち運べて、軽薄短小になっていきましたね。カーステレオのカセットデッキで聴けるようになったことも、（カセットテープが広がるのに）大きかったと思います。

M1さんが46、47歳のときにMDが出てきて使ってみたが、

音は良くない。ヘッドフォンで聴くから聴けるけど、スピーカーで聴くと奥行きがなくて薄っぺらい。テープデッキもヘッドがないと、（機器）本体がなかったら絶対に聴けない。その点、レコードは音の出る原理がはっきりしてるから、鉄針でも竹針でも押しピンでも、どんな時代にも再生できる。

今でも、カセットテープは音質の点から BGM にしかならず、いい音質がちょっとしんどいときにだけ聴くという M1 さんだが、子どもの声を録るには立ち上がりは早くて便利だったそうだ。「(録音ボタンを) 押したら、『しゃべって』とキューを出して」録っていたそうだ。「オープンリールは立ち上がりが遅いんですよ」。

音楽の趣味以外にも、仕事や子育てなど、ライフスタイルの変化にともなって、録音と再生装置を使い分けてきた M1 さんだが、音へのこだわりの原点はゲルマニウムラジオにあるようだ。

毎週火曜の夜 7 時半から、玉置宏のラジオ番組を聴いてました。寒くても外で聴いて、『子供の科学』に(付録で)ついてたんですよ。学校の理科の授業でコイル巻いて、リード線を高いところにひっかけて、イヤホンで聴いてました。電池も何も要らないから。

一方、四角くて選局がチューナーだけのトランジスタラジオは、M1 さんが子どもの頃の家庭には一家に一台あって、家族 6 人で聴いたそうだ。お父さんが荒井恵子の「三つの歌」を聴いていたことを思い出すという。

「音は結局、ソフトよりも(機器)本体の変遷」と語る M1 さんは、最近、小遣いを貯めて念願の蓄音機を購入したり、「真空管アンプは温かみがあって、聴いてて疲れない」と感じたり、昔の音響機器の良さを改めて発見している。「毎日コンセント入れて、電気を通してやれば機器は長持ちする」とメンテナンスも怠らない。音にこだわるだけに、ながら聴きはしないのか、「車ではラジオを聴いてますよ、NHK。情報が入ってきますからね」。あくまでも音楽はじっくり座って鑑賞して、という関わり方の方である。

#### 【M2 さん：昭和 26 年生まれ・兵庫県在住】

オーディオやレコードは聴くだけでなく、スピーカー制作まで凝る M2 さんは、あらかじめ音響機器の乗り換えの歴史を表に書いて用意したうえで、インタビューに協力した(表 1 ならびに表 2)。姉たちが結婚して実家を出て、母親と二人だけになったので、自分は音響機器に没頭したこと、まわりにも機械好きな人がいた影響を受けたことを回想した。

働きだして最初から高いのは買えんからね。徐々に買い揃えていったんや。1970 年の 19 か 20 歳くらいから、『週刊 FM』見て、ラジオ番組のライブを録っていった。オープンリールでスタートして、テープの単価も高いから、置き場所とボリューム、扱いにも苦労した。朝 4 時から 5 時くらいから、近所の開発でダンプカーが走って、トラックの無線が入ってテープがよう止まった。アンテナ立てても拾ってしまう。今は規制があるけど、当時はチューナーのメーターが振り切れてだいぶアウトになった。

1990 年頃からはスピーカーを自作するようになる。長岡鉄男のオリジナル・スピーカーを雑誌で見て、工作するように。「50 万、100 万(円)の既製品よりいい音がする」と聞いて興味を持って、現在もホームセンターで持参した型紙に合わせてベニア板を切ってもらい、ハコを作っているという。だが、こうしたオーディオマニア、レコードマニアの世界をかえりみて、

だんだん我が強くなっていくと、「こんな高いの持ってる」とか「こんなん、持ってへんやろ」となったり、ストーリー通りレコードを聴かせたりするようになっていくのはちょっと…

と機器やコレクション自慢になりがちだという思いから、自分は地域のレコード鑑賞会に関わって、音が好きで来る人たちのために、自作スピーカーや真空管アンプを会場に持ち込んでメインの音響スタッフを務めている。「自分が楽しめないと続かない」と、準備時の音チェック時に自分のレコードを広い会場で聴くことを喜びとしている。

趣味の域やったらええ、という態度に出たら、お客さんにもわかる。装置担当としては毎回なんかせんとあかん、完璧にいかなくても、課題があったら長続きすると思ってる。「次またなにかやるのかな？」と来た人に思ってもらえるように、たえず回転してるように、やり方もマイナーチェンジしてる。

地域のレコード鑑賞会への貢献を張り合いに感じている M2 さんだが、「ぼくは思い出で聴かない」

という M2 さんは、音楽はライブではなくレコードで聴く派だ。

コンサートは場所にもよるけど、高いお金を出して3階席から双眼鏡で見るとくらいなら、それでレコードが何枚か買える。繰り返し聴けるし、形として自分の財産にもなる。

「この曲はこのステレオつなごうとか、どれで聴いたらええ音になるか試す楽しみがある」という M2 さんも、M1 さんと同じく、車ではラジオを流し、カーステレオは聴かないそうだ。音楽は「ながら聴き」をせず、じっくり座って専念聴取する点が共通している。日々、レコードや再生機器について探求しながら、地域社会では M1 さんとコンビを組み、いい音を分かち合える仲間を求めて、地域貢献としてのレコード鑑賞会にたずさわっている。

表 1. M2 さんの音響機器の歴史 (1)  
(表の縦軸は年代、横軸は再生機器)

|      | チューナー                        |
|------|------------------------------|
| 1970 | トイ KT-3000<br>(1971.1)       |
| 1980 | ヤマハ T-7<br>(1980.11)         |
| 1990 | カカト KT-1010F<br>(1986.12)    |
|      | パイオニア F-717<br>(1989.)       |
| 2000 | パイオニア F-D3<br>(2000.2)       |
| 2010 | アキュフェーズ<br>T-106<br>(2009.1) |

表 2. M2 さんの音響機器の歴史 (2)  
(×印はすでに処分した機器)

|      | オープンリール<br>デッキ          | カセットデッキ                 | DAT                            | MD                            | DVD<br>レコーダー                   | CD<br>CD+カセット<br>CD+MD            |
|------|-------------------------|-------------------------|--------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1970 | TEAC A2300B<br>(1971.2) |                         |                                |                               |                                |                                   |
| 1980 |                         | ビクター DD-5<br>(1980.12)  |                                |                               |                                |                                   |
|      |                         | LO-D D-X8<br>(1985.)    |                                |                               |                                |                                   |
| 1990 |                         | ヤマハ KX-1000<br>(1989.7) | サンソン<br>DTR-2000G<br>(1990.11) |                               |                                |                                   |
| 2000 |                         |                         | ソニー<br>DTC ZF 700<br>(1997.3)  | ソニー<br>MDS JB920<br>(1998.11) |                                |                                   |
|      |                         |                         |                                |                               | ×パイオニア<br>DVR 540H<br>(2006.9) | TEAC<br>CD-RW900<br>(2008.2)      |
| 2010 |                         |                         |                                |                               |                                | TEAC<br>CC-222SL MKII<br>(2012.2) |
|      |                         |                         |                                |                               |                                | サンヨー<br>FR-N9NX-S<br>(2013.2)     |

**【考察】**

メディア社会学者の加藤徹郎は、1930年代のレコード喫茶において、商業主義を内包する複製芸術と、議論を引き起こす場としての公共空間が同時に誕生していたことに注目する。そして、ユルゲン・ハーバーマスのいう文芸的公共圏が第二次世界大戦前の日本でどう生成していたかを論じている<sup>[8]</sup>。加藤は、戦前の日本においては、複製芸術を集団で聴取する機会が生演奏を聴くよりも多く、レコード鑑賞会のような趣味縁の枠組みのなかで人びとの「音楽を消費するスタイル」が形成されていったこと。また、プレーヤーやレコードそのものが当時は高価で、学生などには手が届かなかったこと。そして己の少量のコレクションを聴くよりも、豪華なレコード喫茶でゆったりと音楽を聴く贅沢さを享受していたため、音楽を集合的に消費する心地よさを味わっていたのではないかと指摘する<sup>[8]</sup>。

本節で紹介した3名も、自宅でレコードを聴く際には近隣や同居家族への遠慮から、大音量を楽しめず、代わりに地域のレコード鑑賞会でシアター仕様の高音質のスピーカーから聴く自分のレコードの鑑賞を堪能している。戦前の学生たちが自室ではなく、レコード喫茶に足を運び、自分たちのコレクションよりも幅の広い音楽を楽しんでいたのと同様、現代の音楽愛好家も、地域コミュニティで、集団でレコードを聴く時間を楽しみに鑑賞会に参加している。

では、公共圏における文化創出の場としては、地域のレコード鑑賞会はどういう役割を果たしているのか。鑑賞会の参加者のなかには、自分のレコードがかかったら、それ以降は聴かずに帰る者もいるが、本節で紹介した3名は、鑑賞会への参加を出発点に、コミュニティラジオへの出演や、レコード鑑賞会のボランティアスタッフを引き受け、活動範囲を広げている。自分がスタッフを務める地域のレコード鑑賞会ばかりでなく、他地区の鑑賞会にも参加し、社会関係資本の形成にも余念がない。

Kさん、M1さん、M2さんの3名は同じレコード鑑賞会やコミュニティラジオの番組づくりにチームで取り組んできたが、その音楽メディア体験の変遷は大きく異なる。昭和ひとケタ生まれのKさんにとって音楽の原点は蓄音機と青空楽団の生歌だった。また同じ戦後生まれでも、狭義の団塊世代（昭和22年～24年生まれ）よりも前に生まれたM1さんはKさんと同様にラジオを家族で聴いているが、狭義の団塊世代よりも後に生まれた

M2さんはラジオを個別に聴いている。もちろん家庭環境の違いも考慮しなければならないが、アナログメディアのなかでも戦前と戦後に音響機器や記録媒体が大きく移り変わってきた音楽体験が、レコード鑑賞のような公共の場でどう重なり、どうずれていくのかを、身体的な経験の集合的歴史としてさらに記述していく必要がある。

3名に共通しているのは、自分よりも年長者との関わりで蓄音機にふれていった体験が、生涯の音楽好きを支えている点だ。Kさんは隣に住む年長の「お兄さん」、M1さんは学校の音楽の先生がかけてくれた蓄音機、M2さんは地元の女の子たちの踊りの手伝いで回した蓄音機が幼少期の体験として残っているという。自分の家庭になかった機器だったからこそ、生涯をかけてその魅力を追い求めるようになったのかもしれない。レコード鑑賞会に参加する第二のタイプ、すなわち自宅にレコードプレーヤーがない方たちの気持ちにも共感するむきがあるのだろう。参加者が持ち寄ったレコードには個別の記憶が染みついているにしても、レコードを回す行為は他者と共通の体験で、会場でレコードをかけるプレーヤーは皆で共有できる点が、小論で考察した地域のレコード鑑賞会の醍醐味なのではないか。

**おわりに**

紙幅の関係から、小論ではレコード鑑賞会への参加者の3つのタイプのうち、第一のオーディオマニアの参加者への聞き取り調査の分析に絞って考察した。日本各地に広がるレコード鑑賞会そのものの意義づけについては限界があったが、今後も歴史的・身体的な共有体験としてのレコード鑑賞の現代的意味についてさらに調べていくことが不可欠だ。

また、社会教育としてレコード鑑賞会をとらえる際には、他の形態の音楽サークルとの比較も必要となる。うたごえサークルやハーモニカサークルなど、高齢者の参加者が多い団体から、より若い世代が参加する楽器サークルなど、生涯学習としての音楽の人気を支える集合的・共有的な身体実践としての音楽について考えることで、メディアから見た音楽の特性を社会における他者同士のつながりにどう生かせるか、その方途も見えてくるであろう。

音楽のデジタル化が行き渡った現在、プラットフォーム上で交換される情報としての音楽に関心が集まる方向性とは逆に存在する、温故知新の動きであるアナログメディアと音楽の研究の一環と

して、小論では地域に根づくレコード鑑賞会を事例に取り上げ考察した。レコードをかける身体(アナログ)の共有からプラットフォーム上の情報(デジタル)の共有へと音楽と人との関係はどう移ろいゆくのか。今後も引き続きレコード鑑賞会を調査し、その行方を見届けたい。

### 付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費(課題番号 S3013)の助成を受けたものである。

### 引用文献

[1] Novak, David. 2・5×6 metres of space: Japanese music coffeehouses and experimental practices of listening. *Popular Music*. 2008, 27 (1), p.15-34.

[2] 溝尻真也. “オーディオマニアの生活史—〈媒介〉としてのメディア技術をめぐる語り—”, 現代風俗学研究. 2015, 16, pp. 42-53.

[3] Sterne, Jonathan, *The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction*, 2002.

(中川克志ほか訳, 聞こえる過去—音響再生産の文化的起源—, インスクリプト, 2015), 谷口文和ほか, 音響メディア史, ナカニシヤ出版, 2015, “特集 音と聴取のアルケオロジー”, 表象 09, 2015.

[4] 渡辺武達. “技術決定論”. 渡辺武達ほか編, メディア用語基本事典〔第2版〕. 世界思想社, 2019, p. 88.

[5] 小泉恭子, メモリースケープ—「あの頃」を呼び起こす音楽—, みすず書店, 2013.

[6] 浅野智彦, 若者の気分—趣味縁からはじまる社会参加, 岩波書店, 2011, pp. 50-51.

[7] 佐藤智子, 学習するコミュニティのガバナンス—社会教育が創る社会関係資本とシティズンシップ—, 明石書店, 2014, pp. 90-91.

[8] 加藤徹郎, “文芸的公共圏としてのレコード喫茶の生成過程—戦前の複製芸術文化を中心に—”. *メディア環境の物語と公共圏* (現代社会研究叢書 10). 法政大学出版局. 2013, pp. 103-128.

### Abstract

This article focuses on record concerts held by public halls, civic music halls or community centers in Japan. These listening practices are created as new local communities for senior citizens. Using a research method of life history interview in sociology, this study sheds light on how historical and physical experience of listening practices have been shared among participants of local record concerts. Dividing the participants into three types, this study analyses how the first type participants, *i.e.*, audiophiles have been socialized through life stories of practicing music listening and using music media. It is revealed that audiophiles put importance on exchanging approval among members, achieving social contribution for local communities, or acquiring social capital through attending local record concerts.

(受付日: 2019年10月24日, 受理日: 2020年2月10日)

### 小泉 恭子 (こいずみ きょうこ)

現職: 大妻女子大学社会情報学部教授

Ph. D. (University of London Institute of Education)

音楽社会学を中心とした文化社会学, メディア文化論を専門とする. ポピュラー音楽の受け手であるリスナーの研究を継続している.

主な著書: 音楽をまとう若者 (単著, 勁草書房), メモリースケープ—「あの頃」を呼び起こす音楽— (単著, みすず書房).